No.22　**「三百…三千…六千そして三万」**

2010年9月25日

ややうろ覚えですが、子規の句に…

三百の俳句閲（けみ）して柿一つ／

というのがありました。「三千の」かもしれません。
　『仰臥漫録』『病床六尺』などを読みなおしてもみつかりませんでした。

「三百」なら日本新聞の俳句欄への投句を閲していたと思われます。

「三千」なら古今の俳句誌を集め、病間に獺祭式にくりひろげて、俳句の革新を模策していたのかな、と思います。

　いずれにしても、下五のくくりが如何に柿が好物だった男のおもかげを浮かびあがらせいて、そこが印象に残ります。

　俳句はあの短さですが、それにして一挙にたくさん読むのは、容易なことではありませんね。文庫本に纏められた個人句集、例えば『蕪村句集』『子規句集』などでも全句読み切るのは疲れます。

　ところが一回に六千句、それを月に五回もやってらっしゃる先生方がおいでになると知って驚きました。

　稲畑汀子、金子兜太、大串章、長谷川櫂の四先生…と書けばお分かりでしょう、『朝日俳壇』です。文芸春秋増刊くりま五月号の石田千さんのルポによります。

　これによると、あの俳句欄に、毎週六千余句の投句があるとわかります。六千を切る時もあるでしょうが、とにかく、これを三百句、つまり、ハガキ三百枚ずつに纏めて、ゴムの指サックをはめてパラパラとお読みになり、各先生が十句選出する。

　いやー、たいへんな数ですねえ。一月５週とすれば、三万句です。

　思いをかえれば、俳壇・俳句欄のある大新聞は一紙だけじゃありませんから、一ヶ月にざっと十万句をこえる投句がある、ということでしょう。

　これを年間にすると…いや、よしましょう、とにかくこれだけ膨大な数の文芸作品が集まる国って、こりゃーもう日本だけじゃありませんかねえ、絶対に。老若男女こぞって、こんな文芸活動をやっているところは、世界で日本だけ！！！

　しかしそれが、大新聞だけじゃないし、そう！ＢＳも含め『NHK俳壇』がありますし、俳句に関わる各誌や、それに各地でもやってますからね。まさに、日本独特、日本固有の文芸状況でしょう。

私も幾度か『朝日俳壇』には投句しました。その度に思い届かずで、いまや望遠鏡で眺めている感じです。でも、六千の中から四十句なんですからねえ…その時、運悪く、掬い取られなかった中にも、ぴかりと光るのがあったんじゃないか、と思いますよ…。

今日もまた竿は届かず木守柿／

石田さんの『…俳壇』ルポによれば、ひとりで「何百枚も送ってくるひと」がいるとか、また稲畑さんによれば「いい句は、とびこんでくる感じのするの」（同ルポ）であるとか。それにしても、怨念こもる何千枚、何千句いや何万句があるはずですね。

掬われなかった（いや、救われなかったかな）何万通に、見逃された何万枚に…どうでしょうかねえ、供養塔でも建立したら…。建設費用は、当該新聞社とハガキの元じめ・郵政省、俳句愛好家の喜捨などで……。

暮れ残る小枝に揺れて柿一つ／

茅ヶ崎　　山内重昭